

# 加賀鳶発祥 300年



## ❁ 加賀鳶とは

江戸幕府の八代将軍徳川吉宗が禄高一万石以上の藩に対し、江戸藩邸を守る大名火消を設置するよう命じたのを受けて、享保3年（1718年）加賀藩では江戸上屋敷の防備のため設置されていた自衛消防隊を豪華なものに増強しました。これが加賀鳶の始まりであるとされています。

加賀藩お抱えの火消しは、勇猛果敢な活動と華麗な装備で知られ、当時の浮世絵や歌舞伎の題材になったこともあり、大名火消しといえば加賀鳶のことを指すようになったのであります。

明治に入り江戸藩邸にあった加賀鳶38人が金沢に移り住み、江戸の技と金沢在来の技が融合し今日の姿になったものと考えられています。

## ❁ 加賀鳶梯子登り

梯子登りは江戸時代、火消しが火災現場で高い梯子を立て、頂上から火事の状況や風向き、建物の状況を確認めたことが始まりで、さらには高所での作業を行うための訓練、度胸、勇気をつけるためにも行われたと言われています。

火消し達は威勢と気魄を信条に、身軽な仕種と熟練した技をもって、住民の前にその演技を披露するとともに、消防の重要さを訴える役割も担っていました。

この梯子登りを最初に行ったのが加賀鳶で、いわゆる日本の梯子登りの元祖です。

平成21年12月に加賀鳶梯子登りは石川県無形民俗文化財に指定され、出初式・百万石まつりなどの主要行事に出演しています。



## ❁ 加賀纏

火消し道具の一つである纏は、江戸時代から現代に至るまで、消防のシンボルとしてよく知られています。起源を藩政期に持つ加賀纏も、今日、金沢市消防団の49分団全てが所持し、地域の防災を司る消防団活動の心意気を示す象徴となっています。

加賀纏の大きな特徴は、全分団の纏が梅花を象る同一形状の頭に記す分団名と、馬簾（ばれん）に残す二筋の黒地以外、総体を金箔で飾る仕様で統一されている点にあり、華麗な容姿を持つ纏の様式は全国的に類がありません。近隣県や県内他市町でも、類似の金箔仕立ての纏を所有していますが、それらは加賀纏が伝播していったものとされています。

